



# 日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2002.4 第7号



提◆言

## 時ならぬ余録を万が一の備えに生かす努力を

日本SPF豚協会副会長 高橋 吉男  
(株)シムコ常務取締役

テレビで繰り返し生々しい映像が報道されたアメリカでの同時多発テロはまだみなさんの記憶に新しいものと思います。一見盤石に見える現代社会のもろさを露呈したものでした。

また、日本では、出るはずがないといわれていたBSEが続いて発生し食肉業界は大混乱になりました。発生するはずがないので、発生した場合の対策が立てられていなかったと報道されています。

さらにBSE問題が治まりかけた時に、買い取り制度を悪用した雪印問題が明らかになり、混乱がさらにエスカレートしました。

これらの共通項は「危機管理」といえるでしょう。「日本人は安全と水はただと思っている」といわれます。このことは海外へ行くとはっきりと実感させられます。

日本の駅では列車を待つ列に鞆を置いてちょっと買い物に行く光景がよく見受けられます。

10年ほど前のヨーロッパのある空港での事でしたが、出国手続きを済ませた後、連れの一人が鞆を片隅に置いて免税店を見に行きました。しばらくして巡回していた警官がその鞆を見つけ「この鞆は誰のだ！」と血相を変えて怒鳴ったのです。とたんに近くにいた人は鞆の周囲からすーと遠ざかりました。警官は置き去り鞆による爆弾テロを疑ったのでした。

爆弾テロの疑いの晴れた後は、置き引きが多いので、自分の荷物は自分で責任を持ってとさらに怒られました。

先進国でこのような状態です。治安の悪い国では自分の財産は自分で守らねばなりません。

いま、畜産関係者の目はBSEに向いていますが、人、物ともに国際交流がますます盛んになり、海外伝染病が日本へ侵入する危険はますます増えてきます。先年発生した口蹄疫をはじめとする海外伝染病に対する警戒を持ち続けなければなりません。

一方、BSE問題で牛肉の消費が落ち込むにつれ、鶏肉と豚肉の消費が伸びています。この時期としては異常ともいえる高豚価が続き、養豚業界は時ならぬ余録にとまどっています。BSE問題は牛の関係者にとっては自分たちの与り知らないことが突然降りかかってきたもので同情に堪えませんが、豚の業界でも何が起こるか分からないのです。そこで、この降ってわいたような高豚価を今後の不測の事態に備えるために十分に生かさなければなりません。

SPF豚農場に特徴的な落とし穴の一つは、開始当時はほとんど病気の問題がないため、病気に対する備えが甘くなることです。地域病的に蔓延する疾病には畜産目的のSPF農場の防疫体制では防ぎきれないものが出てきています。病気を入れないことはもちろんですが、入ってしまった場合の備えも想定しておく必要がある時代になってしまいました。

この機会に自農場の防疫、経営の弱点を的確に把握し、万が一の対応策を用意しようではありませんか。

SPF  
養豚の  
はじまり

⑥

Primary SPF豚の作出施設は当時の家畜衛生試験場にしかなく、そこへ妊娠豚を持ち込んでSPF豚を作出し、3週間の人工哺育の後、SPF豚農場へ運搬して育成する方法がとられた。

これらの開発手法は当時同試験場においてSPF豚研究の中心的役割を果たしてこられた、波岡茂郎博士(現北海道大学名誉教授)の産学協同に関する信条と、その実行力に支えられた絶大な協力に負うところが極めて大である。この間にも絶え間なく試行錯誤が繰り返され、それを数えあげるときりがないが、そのうちのいくつかを次号以降で紹介していきたい。



# SPF種豚と認定農場の分布

(2002年3月末現在)

表1. 認定農場の分布

飼養規模(頭)	北海道	東北	関東	甲信越	中部近畿	中四国	九州	合計	種雌豚総頭数
99以下	2	0	12	3	0	7	5	29	1,803
100~299	6	6	31	5	1	3	20	72	13,291
300~599	4	7	4	3	2	8	2	30	12,559
600~999	0	11	4	0	0	1	1	17	12,648
1,000以上	0	5	2	0	0	0	5	12	18,364
合計	12	29	53	11	3	19	33	160	58,665
種雌豚総頭数	2,701	20,978	12,786	2,276	1,316	4,698	13,910	58,865	

わが国の飼養母豚頭数は92.1万頭(平成13年2月1日現在)であるから、表1、2に示すSPF豚認定農場における母豚頭数は、その6.4%に相当する。また、認定農場の平均母豚飼養頭数は366.7頭(前年対比97.7%)であり、農場数は微増傾向にあるものの、農場の規模はほぼ同様に推移した。

表2. 認定農場数および飼養母豚数の推移

年度 地域	1997年度		1998年度		1999年度		2000年度		2001年度	
	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数
北海道	8	810	9	1,926	10	2,100	11	2,512	12	2,701
東北	23	12,901	24	15,065	28	17,940	28	20,444	29	20,908
関東	54	12,645	69	14,636	56	13,417	52	12,407	53	12,786
甲信越	6	1,151	8	1,775	8	1,780	9	2,202	11	2,276
中部近畿	3	1,261	4	1,750	4	1,750	5	2,101	3	1,316
中四国	17	4,652	17	4,338	19	4,793	18	4,363	19	4,698
九州	22	14,568	26	14,314	25	12,550	31	13,795	33	13,910
全国	133	47,988	157	53,804	150	54,330	154	57,824	160	58,665

表3. 非認定農場の分布

飼養規模(頭)	北海道	東北	関東	甲信越	中部近畿	中四国	九州	合計	種雌豚総頭数
99以下	0	45	18	19	1	7	9	99	5,597
100~299	3	24	28	5	0	14	36	110	18,510
300~599	0	4	11	1	1	5	20	42	16,990
600~999	0	4	6	0	0	0	18	28	19,495
1,000以上	0	3	3	0	0	1	9	16	19,360
合計	3	80	66	25	2	27	92	295	79,952
種雌豚総頭数	600	14,162	18,260	1,895	560	6,360	38,115	79,952	

表1に示した認定農場以外に、認定は受けていないものの、SPF豚のみを飼育し、SPF管理を行っている農場が相当数存在する。その地域別、規模別分布をまとめたものが表3であるが、前年に比べ農場数は14%、飼養頭数も28.5%増加し、とくに関東以北、中四国の増加が著しい。

表4. SPF種雌豚飼養規模別農場数

飼養規模(頭)	北海道	東北	関東	甲信越	中部近畿	中四国	九州	合計	種雌豚総頭数
99以下	2	45	30	22	1	14	14	128	7,400
100~299	9	30	59	10	1	17	56	182	31,801
300~599	4	11	15	4	3	13	22	72	29,549
600~999	0	15	10	0	0	1	19	45	32,143
1,000以上	0	8	5	0	0	1	14	28	37,724
合計	15	109	119	36	5	46	125	455	138,617
種雌豚総頭数	3,301	35,140	31,046	4,171	1,876	11,058	52,025	138,617	

平成14年3月末のSPF種雌豚飼養農場数は455(前年対比110%)、飼養総頭数も15.5%増加したが、農場当たりの平均飼養頭数は304.7頭となり、飼養規模が4.5%増大した。とくに中四国、関東、甲信越と北海道における農場および飼養頭数が増大した。



# CM認定農場の生産成績

(2001年次)

表1 一貫経営

	母豚頭数	離乳頭数	飼養要求率	事故率(%)	母豚更新率(%)	薬品費	農場数
件数							128
最高(成績)	2,305	25.50	2.74	0.19	11.60	¥10.80	
最低(成績)	22	18.39	3.43	6.30	86.60	¥591.00	
平均値	330.07	22.06	3.18	2.93	28.62	¥258.11	
標準偏差	358.09	1.40	0.13	1.28	8.14	¥166.08	
上位25%の平均	800.63	23.90	3.01	1.42	20.50	¥64.53	
基準値		21.00	3.30	2.00	30.00	≦¥600.00	

表2 肥育用素豚生産専門農場

	母豚頭数	離乳頭数	事故率(%)	母豚更新率(%)	薬品費	農場数
件数						9
最高(成績)	1,398	24.30	2.10	18.50	¥19.00	
最低(成績)	57	21.00	4.70	37.80	¥400.00	
平均値	597.40	22.46	3.16	29.99	¥155.27	
標準偏差	441.56	1.13	0.79	5.35	¥122.86	
基準値		21.00	2.00	30.00	≦¥400.00	

表3. 肉豚肥育専門農場

	肉豚出荷頭数	飼料要求率(%)	事故率(%)	薬品費	農場数
件数					2
最高(成績)	9,296.00	3.44	2.23	¥132.00	
最低(成績)	2,634.00	3.96	3.40	¥255.00	
平均値	5,965.00	3.70	2.82	¥193.50	
標準偏差	3,331.00	0.26	0.58	¥86.97	
基準値		3.30	2.50	≦¥300.00	

表4. 肉豚1頭当たり薬品費使用の内訳

薬品費/肉豚	農場数	平均金額
100円未満	28	¥50.28
100円～199円	28	¥143.91
200円～299円	27	¥245.24
300円～399円	15	¥341.50
400円～499円	21	¥455.90
500円～599円	12	¥549.42
農場数	131	
最高		¥591.00
最低		¥10.80
平均		¥255.85
上位25%の平均		¥63.20

日本SPF豚協会が平成13年に認定した農場は160であり、うちCM農場は139農場である。

CM認定農場数は、前年に比べ、6農場増えたが、肥育用素豚生産専門農場が4農場増加した。立地条件と生産効率向上を目的として、従来の一貫生産農場から子豚生産農場へ変換した農場が増える傾向がみられる。

平成13年におけるCM認定農場の生産成績は表1～表4に示すとおりで、飼養規模は若干大きくなったが、生産成績は前年とほとんど変わらず推移した。



# トキソプラズマ病

全農家畜衛生研究所 浅井 鉄夫

トキソプラズマ病は、トキソプラズマ原虫によって引き起こされる、SPF豚対象疾病の中で動物とヒトの間で感染する唯一の疾病（人畜共通伝染病）です。本病は、豚のほかめにん羊、山羊、イノシシを対象とする届出伝染病ですが、現在はほとんど報告がありません。ヒトは、ネコの糞便中に排泄されるトキソプラズマで感染するほかに、感染動物の肉を十分に加熱しないまま食べたり、調理器具や手指を介して汚染した食べ物を口にすることで感染します。ヒトは、トキソプラズマに感染してもほとんどが無症状ですが、妊娠中に感染することで新生児が感染（母子感染）し、水頭症などの脳の障害が引き起こされます。このように、食肉を生産・流通する上で、トキソプラズマ感染には十分注意しなければなりません。

豚における病状は、急性と慢性に分けられます（表参照）。チアノーゼや呼吸器症状は、トキソプラズマ感染以外にも引き起こされる症状です。また、流産など繁殖障害は、豚群の中で散発的に発生する場合があります。トキソプラズマに感染したほとんどの豚は、無症状に経過しますが重要な感染源となります。このように、トキソプラズマの感染は、臨床症状のみで判断できないため、病理検査や抗体検査を実施することが必要となります。

トキソプラズマ病の診断は、感染豚から原虫を検出する方法がもっとも確実ですが、発症豚をのぞいて原虫が検出されることは極めて稀であり、抗体検査（色素試験、間接凝集反応、ラテックス凝集反応など）が一般に利用されています。抗体検査では、他の原虫感

表 豚での臨床症状

病 型	症 状
急 性	高熱、呼吸困難、腹式呼吸、湿性の咳、チアノーゼ（耳の先端部が壊死により脱落）、皮膚の出血斑、下痢・便秘
慢 性	発育不良、ヒネ豚、神経症状、死流産

染などによって非特異的な反応が起こる場合があるため、投薬にあたっては獣医師に判断してもらうことが必要です。

豚のトキソプラズマ病では、スルファ剤（スルファモイルダブソン、スルファモノメトキシシ、スルファジメトキシシ）、ピリメタミンおよびそれらの合剤（スルファ剤とピリメタミン）などが、治療（注射）や予防（飼料添加）に利用されています。抗体検査で豚群への汚染が疑われた場合、有効薬剤によるクリーニングが行われます。また、トキソプラズマ病が疑われた個体に対し有効薬剤を注射し、症状の改善を観察します。これまでに行われた抗体検査の成績などから、母豚群では産歴の多い母豚、肥育豚では月齢の進んだ豚で陽性率が高いことが知られています。このことから、種豚群に対して年2回（たとえば春秋）有効薬剤による予防的なクリーニングが行われる場合があります。

トキソプラズマは、一般的な消毒薬が無効であるため、煮沸や熱湯の散布など加熱消毒を行う必要があります。発生農場においては、有効薬剤による感染や発病の防止とともに、豚房の洗浄と消毒（オルソ剤）した後、石灰塗布による封じ込めを行う場合があります。

トキソプラズマは、各種動物に感染することが明らかになっていますが、トキソプラズマが増殖する上で、ネコが最も重要な宿主となります。感染したネコの糞便に汚染した飼料や飲み水は、感染源として最も注意する必要があります。このため、農場へのネコの侵入には、十分に注意しなければなりません。その他の豚群への伝播経路として、野生動物や車両などが疑われた場合もあります。場外からの機械的伝播は、SPF豚農場の防疫管理基準を遵守することで、ほとんど遮断することができます。ネコの侵入防止やネズミの駆除や入場時の車両消毒など農場の防疫管理状況を再点検してください。



# 授乳母豚には何を注意するか？——①

伊藤忠飼料(株)研究所 鈴木 保

## 飼料の給与

分娩前後から離乳まで飼料給与プログラム（図1）は、おおむね皆さん同様です。分娩時はやはり給与を避けるか最低限2kg程度に抑えるべきでしょう。前回述べたように妊娠末期に十分な栄養を採ったならば、分娩予定日は母豚の基礎維持量で十分なのです。給与量が多いと、難産や発熱に伴い母乳の出が悪くなる場合があります。

分娩後も飼料給与は慌てることなく、翌々日から増加させれば十分です。子豚の体重増加は1週目以降から急激に起こりますので、母乳量もそれに合わせて増えればよいのです。

では授乳初期は何が必要なのでしょう。初乳中に免疫型の蛋白質が多いのはよくご存じだと思います。すなわち分娩前後の母豚には他の時期とは異なり、蛋白質（バランスの良いアミノ酸）やビタミンが相対的に多く必要となります。したがってアミノ酸含量（特にリジン）の高い授乳期用飼料が有効となります。飼料給与量を抑えたい時などには、より便利でしょう。

また授乳中期から後期についても、夏季など食い込みが悪い場合は、エネルギーだけに目を向けるのではなく、アミノ酸含量やミネラル（有効リンなど）が多い飼料を用いた方が離乳後の再起発情にも有効です。

分娩後から離乳まで、なるべく母豚の体重を維持することが重要です。初産に見られる著しい減耗は赤信号です。特に授乳期間を短くして回転率を上げる最近の方式は、いかに母豚の体調を維持するかがポイントです。授乳期間についても、減耗の激しい母豚や、夏季に食下量が減った場合は、離乳を早めるべきでしょう。ただし離乳は、18日より前は避けましょう。

離乳時は、餌は絶食するか最低維持量（1.5kg程度）にした方が、離乳時の母豚のホルモンバランスの切り替えや乳房炎防止に有効と考えられます。

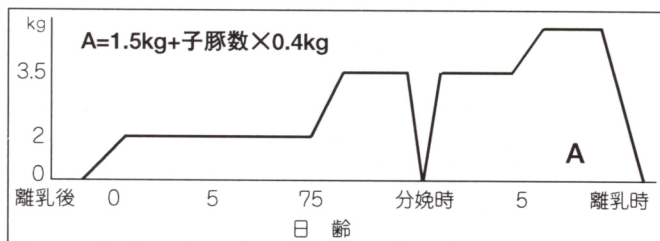


図1 給与プログラムの一例（飼料：Lys0.85%,TDN78%）



分娩豚房での遮温

いずれにせよ、母豚それぞれの飼料給与量を把握しておくことは重要です。

## 温度の管理

分娩舎内の温度管理は意外と難しいものです。子豚は暖かくしたいし、母豚は涼しくしたい。どちらを優先するか、それが問題です。分娩舎全体の室温は、上げ過ぎるべきではありません。冬でも15℃程度あれば十分なのです。重要なのは、分娩豚房内での温度環境づくりです。子豚の寝る場所は暖かく（30℃以上）、母豚のいる場所は涼しく。できるだけ子豚のいる場所と母豚の場所は、温度が遮断できた方がよいでしょう。保温箱を用いてもいいし、写真のようなちょっとした細工も有効です。

特に夏冬は注意が必要です。冬は、母豚が種豚舎と分娩舎の室温差が大きければ離乳後すぐに体調をくずしますし、夏は子豚への保温熱で母豚が熱中症を起こします。

また夏季の母豚へのドリップクーリング（水滴）のやり過ぎで、豚房をびちゃびちゃにしないように。子豚の体調を著しくくずします。やはり母子の住処の環境遮蔽は必要でしょう。（次号へ続く）





## SPF豚管理で知った 養豚の原点

(株)ノイバーン代表取締役 **清水 益夫**

私の農場がSPFに変換して460週（8年10か月）になります。コンベからSPFに換える際、週単位で計画的に作業を組んで行っていました。そのとき1日に入浴した回数は実に7回から8回になりました。これは新規にスタートしたわけではなく、逐次変換の試みだったからです。人間の移動が必ずSPFエリア→コンベエリア、の方向になるようにするため、コンベ

→入浴→SPFを守りながら作業を進めました。

その間は着衣も入浴の回数だけ取り替えました。その経験があったおかげで、それまで考えていた衛生観念が一度に吹き飛び、基本にのっとった管理があっただけでSPF状態が維持されることを知りました。養豚の衛生管理の原点に戻り、それを徹底することによって肌の色も変わり、ピンク色をした毛艶のよい健康的な豚になりました。

そういう豚をながめる事は本当に気持ちのよいものです。人間が生産の効率を重視し続けるのではなく、豚の幸せを追求するような養豚を目指していきたいと強く考えます。結局は、それが人間にはねかえることを、痛感している今だからこそ…。



## 消費者に安心してもらえる 業界であるように—

(株)林商店肉豚出荷組合 **鈴木 良雄**

近頃、雪印食品に端を発した牛肉の不正表示問題がマスコミを賑わしています。食肉に携わる一生産者として大いなる不快感を感じるとともに由々しき問題であると憤りを感じます。

一方豚肉に関しても、スーパーでパックになってい

る“黒豚”や“SPF豚”の表示などに疑問を感じている畜産関係者も少なくないはず。BSE問題も含め決して「対岸の火事」とはいえません。豚肉についても不正表示など当然あってはならず、流通段階での透明性が求められなければなりません。

SPF豚協会および我々生産者も一体となって、流通段階における監視や差別化がより徹底されるようなシステムが望ましいと思います。

消費者に対して、胸を張って「安心です」といい続けることのできる業界であらねばならない、と痛切に感じている今日この頃です。



## 「いのこ家」オープン 3周年を迎えて

SPF豚しゃぶ店  
「いのこ家」マネージャー **日浅 順一**

平成10年3月、札幌のススキノにSPF豚肉専門店として『いのこ家』がオープンしました。SPF豚のしゃぶしゃぶがメインで、よそではなかなか口にできない、豚のにぎりや刺身も提供しております。

私は、それまで農場の手伝いをしていたので（編集部注：協会会員日浅文男さんがお父さん）、SPFのおいしさは知っていましたが、はじめの頃は、SPF豚の知名度の低さや、ビルの7階というお店には比較的不利な場所だったことで、とても苦労しました。料理長の愛情のこもった料理と、真心込めたサービス、そして、お客様にとって居心地のよい空間づくりを心がけた結果、

最近では予約なしでは入れないほどまでになりました。

また、お客様をお送りするときには「おいしかったよ！」と心からいっていただいているのを実感しております。

現在、いのこ家は札幌・函館に2店舗を構えておりますが、さらにたくさんの方にSPF豚肉のおいしさを味わっていただけるよう、今後も店舗の拡大に努めていきたいと思っております。

### 【すすきの本店】

札幌市中央区南4条西3丁目 第3グリーンビル7階  
Tel(011)520-0158 営業時間：午後5時～翌朝2時

### 【はこだて店】

函館市本町26-15 ライオンズマンション五稜郭1階  
Tel(0138)56-0158

営業時間：(ランチ)11:30～2:00 (夜)5:30～10:30

【ホームページアドレス】 <http://www.ionokoya.co.jp>



## ●協会からのお知らせ●

### ●理事および認定委員会の交代

全農ピラミッドの理事および認定委員が横山春樹氏から工藤 修氏に交代になりました。

また、(株)シムコピラミッドの認定委員が阿部宇一郎氏から山室 脩氏に交代になりました。

### ●住所変更のお知らせ

日本ハイポー(株)ピラミッドの住所が次のとおり変わりました。なお、電話番号は変更ありません。

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-14-4 四国ビル別館

### ●総代会を6月に開催

平成14年度の総代会は6月13日に開催されます。

### ●今年のセミナーは11月に東京で

今年の協会主催のセミナーは11月18日、東京都千代

田区・J Aホールでの開催を予定しております。詳細は決定次第『協会だより』等でお知らせしますのでぜひご参加下さい。

### ●『だより』のご意見、感想をお聞かせ下さい

編集部では「会員／読者のページ」を設け、会員の皆さんの声を反映した誌面づくりをめざしています。『協会だより』の感想、意見はもちろん、協会への要望、疑問・質問、エッセイ等々、ぜひお寄せください。方法は郵送、FAX、Eメール等、何でも結構です。お待ちしております。

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-2-6  
産広美ビル7F

FAX.03-5283-5021 TEL.03-5283-5022  
e-mail : j.spf.a@nifty.com

## ●認定情報●

### ●平成14年度認定農場

[3月認定](有効期間:平成14年3月7日から15年3月31日まで)

秋田県・(有)十和田湖高原ファーム、宮城県・サンエス丸森農場、福島県・(株)フリーデン都路牧場、(株)ユキザワ玉川農場、千葉県・飯田(文)養豚場、石毛養豚場、石上養豚場、平野養豚場、鈴木養豚場、飯田(美)養豚場、高橋秀樹養豚場、(株)シムコ館山事業所、長野県・(農)エスピーエフこがねや第二農場、静岡県・富士畜産(有)室田農場、富山県・(株)シムコ八尾育種改良センター、島根県・奥出雲ファーム

(有)、山口県・日本ハイポー(株)山口農場、愛媛県・松田養豚、(有)川上牧場、愛媛くみあい畜産(株)天貢農場、長崎県・(有)エス・イー・ダブリュー大西海ファーム、熊本県・J A熊本経済連大津原種豚センター、全農SPFAIセンター、新古関養豚農事法人、(有)七城SPFファーム、(有)ピッグファーム陳、(有)やまとんファーム、天草梅肉ポーク(株)、宮崎県・(株)宮崎高原ファーム、鹿児島県・(有)ニッポンフィード牧場 (以上30農場)

※次回認定委員会は平成14年6月6日(木)の予定

## ●SPF豚研究会から●

### ●研究会を5月に開催

第12回日本SPF豚研究会が次の通り開催されます。研究会終了後懇親会も予定されておりますので、皆さんふらつてご参加下さい。

日時:平成14年5月31日(金)午後1時より

場所:東京大学・山上会館 大会議室

実行委員長:鈴木清一(静岡県中小家畜試験場)

#### 演題

- 豚のサルモネラ症関連テーマ
  - ①諸外国でのサルモネラ症とその対策について(仮題)
  - ②国内でのサルモネラ症とその対策について(仮題)
  - ③飼料のサルモネラ汚染の現状と対策について(仮題)
- 豚の強健性と育種について(仮題)
- 豚早期離乳のポイントについて(仮題)
- 厚脂対策について(仮題)

#### 懇親会

午後5時より、同じく山上会館で行われます。

会費は5,000円程度の予定です。

\*研究会会員に限らずどなたでもご参加いただけますが、非会員の方は当日会員登録をお願いします(年会費2,000円)。  
\*協会会員の方で研究会の会員になられていない方は、ご参加の上この機会にぜひ入会されますようご案内申し上げます。

\*会の詳しい内容並びに会員登録等については日本SPF豚研究会事務局(伊藤忠飼料研究所内)までお問い合わせ下さい。

TEL:0287-64-3652

FAX:0287-63-8384

e-mail:kobyashi.kaz@itochu-f.co.jp





有限会社 ケアイファウム  
**小田島 健夫さん**  
 ●岩手県北上市

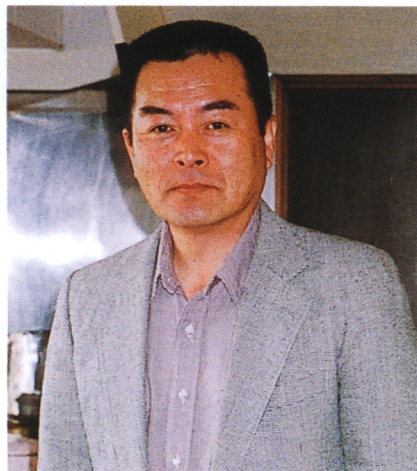
## SPF一筋30年 片道70キロを行き来し 2農場を自ら管理

ケアイファウムが設立されたのは昭和46年。自宅のある北上市から約70キロ離れた岩手郡玉山村で、新たに有限会社として事業を開始しました。「お世話になっていた業界の先輩が、北上のKと岩手郡のIの頭文字をとって命名してくれた」というのが社名の由来です。

小田島健夫さん(52歳)は北上でお父さんが7人の仲間とともに始められた養豚業を継がれた2代目。SPF養豚に取り組まれたのは玉山農場スタート直後の昭和47年からです。当時全国的にTGEが多発していたこともあり「やはり病気による経済的損失から考えるとSPF豚しかなかった」といいます。

現在は北上農場と玉山農場の2農場で1,300頭の一貫経営を行っています。従業員は両方合わせて20名。社長である小田島さんは北上から玉山農場まで週に3回は通っています。通勤時間は車で片道1時間半。夏はさほど苦にならないが、冬場の雪はさすがに大変とか。それでも「よい肉豚をつくるには、①よい種豚、②よい餌、③よい管理、といます。さらに毎日生活する上で重要な水・環境・衛生面等も大事です」と両農場のレベルを維持するためにまさに率先垂範、長距離通勤も軽やかにこなす両農場を行き来しています。

また、地元・北上地方は里いもの名産地として知られているところですが、ケアイファウムでは栽培農



家に堆肥を供給し、好評を得ています。

さらに、小田島さんがとくに力を入れているのが販売面。6割は東京出荷、市場の全面的なバックアップのもと銘柄豚とし

て評価を受けています。また、残りの4割は地元岩手に出荷、とくに産直販売は10年かけて築き上げました。生産者の顔が見えること、を基本に、と場での追跡調査や消費者アンケートなども実施して理解を広めた上で、まず北上市内スーパー5店舗との産直事業をスタートさせました。

現在は岩手県内23店舗、青森県弘前市7店舗、北海道函館2店舗で産直販売を展開しています。「生産さえすれば買ってもらえた時代から、いまは生産者として安心、安全を供給するだけでなく、生産から食卓までの『相互信頼』というものも築いていかなければならない。今回のBSE問題等を教訓としなければなりませんね」と小田島さんはいいます。

豚一筋の小田島さんですが日曜大工が趣味、また、12月から2月の冬場には、近くの仲間と一緒にハムづくりも楽しんでいます。はや10年にもなるとか。

家族は奥さんの静子さん(49歳)との間に娘さんが3人。うち2人はすでに結婚されています。「あと1人も入れば3人のうち誰でもいいから婿さんが跡を継いでくれたらいいんですけどね」と小田島さん。前身時代も入ると今年は創業40周年、節目の年を迎え、地元への貢献も考えて、ますます農場経営に力が入ります。

(株)サンエスブリーディング・佐野公春)

**編集後記** 黒豚の擬装に使われた安い白豚として「SPF豚」の名が新聞に出た。我々はSPFが黒豚に化けるくらい品質の良さ、と思っているが、果たして一般消費者は?…。農畜産物は工業製品ほど製造スピードを簡単にコントロールできない。擬装の理由は「流通サイドから要求されたから」という。一年中世界中から食料品が入手できる今の日本だからなのかもしれないが、食料(とくに農畜産物)生産の常識を忘れさせてしまうような「業界の非常識」はレッドカードではないか。「ないものはない」と分かり合える業界でありたいものだ。(寿)

## 日本SPF豚協会だより

第7号 2002年4月1日発行(季刊)

発行 日本SPF豚協会

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-2-6  
 TEL.03-5283-5021 FAX.03-5283-5022

発行人 赤池 洋二

編集人 林 哲